

敗戦後文学としての『ころ』

——漱石と教科書

野中潤

一、はじめに

夏目漱石の『ころ』が国語の教科書に採録されたのは、一九五六年(昭和31)十一月に発行された清水書院の『高等国語二』が最初である。それ以前に『ころ』が国語教科書に採録されたことはない。尋常小学校用の国定教科書はむろんのこと、戦前の中等学校の国語読本を調べてみても、同じことである。少なくとも教科書教材としての『ころ』は、敗戦後に清水書院が採録するまで存在しなかったのである⁽¹⁾。ただし、清水書院の採録箇所は、上編「先生と私」の最初の部分で、「わたしが鎌倉で先生をみかけ、心が引かれ、時々先生の自宅へ遊びにいくうちに、先生は毎月きまった日に雑司ヶ谷に墓参に行くことを知り、先生の淋しい性格が何かこのことに関係があるのではないかと疑いつつ、その淋しい先生に心が次第に引かれていくという一節」である。『ころ』を教科書に掲載する場合の常道である下編「先生と遺書」の一節を最初に採録したのは、一九六三年(昭和38)十一月に発

行された筑摩書房の『現代国語二』である。つまり、漱石教材の聖典たる下編「先生と遺書」の一節が、教科書に掲載され、『ころ』が定番教材としての歩みをスタートさせるまで、戦争をはさんで数十年の歳月が必要だったということになるのだ。

たとえば、戦前の「中等国語読本」における漱石教材の採録状況については、橋本暢夫の『中等学校国語科教材史研究』(二〇〇二年七月、溪水社刊)に詳しい。橋本によると、夏目漱石が教科書に初めて登場したのは、一九〇六年(明治39)に刊行された『再訂 女子国語読本』の巻五に、『吾輩は猫である』の一節が「鼠を窺う」の見出しで採録されたときのことである。『吾輩は猫である』の上編刊行が一九〇五年(明治38)であることを考えると、きわめて早い段階で教材化されていることがわかる。また漱石教材を採録した教科書は、「ほぼ三〇五種、八七八冊」ものぼり、「延九八二」という高い頻度で採録されている。そのうち小説が「七八%の七六八回」を占めているのだが、『吾輩は猫である』が延一九五回、『草枕』が延四〇七回であるのに対し、「こ

こころは皆無である。小説では他に、『坊っちゃん』『倫敦塔』『カーライル博物館』『趣味の遺伝』『二十十日』『虞美人草』『坑夫』『夢十夜』などが採録されているし、『文鳥』『永日小品』『思い出す事など』『子規の絵』『ケーベル先生』『硝子戸の中』など、橋本の分類によると「感想・随筆教材」にあたるものも多く教材化されている。のみならず、『京に着ける夕』『滿韓とこころ』などの「紀行文教材」、『文学論』『文学評論』などの「評論教材」、正岡子規・中川芳太郎・芥川龍之介・久米正雄宛などの「書簡教材」、「日記教材」、「俳句教材」など、バラエティに富んだ教材が採録されている。ところが、「こころ」は皆無なのである。いったいこれはどういうわけなのか。

戦後の漱石教材について見てみると、当初は『硝子戸の中』や『虞美人草』や『草枕』など、戦前の「中等国語読本」を踏襲した採録が目立つ。新しい傾向と言えるのは、成城国文学会『現代国語三上』（一九五〇年）や三省堂『新国語 文学二』（一九五三年）などで『三四郎』が採録され、東京書籍『国語二年下』（一九五五年）で「私の個人主義」が採録されたことぐらいである。

一九一四年（大正3）の発表以来、一九五六年にいたるまで四十年以上も教材化されなかった夏目漱石の『こころ』が、一九五〇年代に採用が多かった『三四郎』と入れ替わる形で一九六〇年代から七〇年代にかけて採録数を増やし続けたのはなぜか。また、戦前はまったく見向きもされなかった『こころ』が、一九六三年の筑摩書房版『現代国語二』による下編『先生と遺書』の教材化を機に、一九八〇年代には定番教材としての地位を確立し、漱石文学の聖典としての歩みを始

めることになるのはいつたいなぜなのだろうか。

二、教材『こころ』の起源

一九五六年（昭和31）に初めて夏目漱石の『こころ』を採録した清水書院の『高等国語二』を編集したのは、愛知県立女子短期大学学長・日本大学教授の高木市之助と、東京教育大学名誉教授・実践女子大学教授の山岸徳平である。高木市之助は万葉集の研究者であり、山岸徳平は源氏物語の研究者として知られている。指導書の執筆者には、都立竹早高校教諭の三瓶達司、埼玉県立鴻ノ巣高校教諭の中谷幸次郎、千葉大学教授の須藤増雄が加わっているが、教科書自体は、「高木市之助・山岸徳平共編」となっているから、二人のうちのいずれかが主導的な役割を果たして『こころ』の採録が実現したとみてよいだろう。

一九五八年（昭和33）十一月発行の『教授資料』（清水書院）には、「採録の趣旨」として、次のような文章が掲げられている。

森鷗外とともに今日なお最も多くの読者を有している夏目漱石の作品は、もちろん国語教科書から逸せられるべきではない。しかし、さて、いよいよ漱石作品を採録するとして、いわゆるユーモアの筆致をもった「吾が輩は猫である」「坊っちゃん」などの系列、または非人情の文学としての「草枕」以外、つまり漱石文学の根本をなしている自我の剔抉をはつきり作品面に出している作品から素材を選択することは非常に困難なことである。誰の作品でもそうであるが、

殊に漱石の作品は、その作品全体の緊密な連関から部分を切り離して考えることは不可能である。しかし少なくとも高等学校の二年として、漱石文学を単なるユーモアの書としたり、また現実遊離の面のある非人情の世界に導き入れることは好ましいことではないので、青少年に最も多くの愛読者をもつ作品「ころ」をとりあげたのである。ここにとりあげられた問題は学窓生活をおくる者にとつて、極めて卑近なものとして映ずるにちがいない。高校二年の生活も終わりに近い時、じつくりとおのれ自身の心と対決し、ひいて人間の心の在り方にも理解の眼を向けさせたい。

国語教科書における〈暗い漱石〉誕生を告げるマニフェストである。この「採録の趣旨」で照らし出されているのは、『吾輩は猫である』『坊っちゃん』などのユーモア小説と対比されるシリアスな小説としての側面と、『草枕』のような「現実遊離」の「非人情」小説と対比されるリアルな小説としての側面である。そのうえ、「極めて卑近なもの」を見て取る「学窓生活をおくる者」の表層的な読みの裏側に、精読することによつて発見されるはずの深層の読みとして、「人間の心の在り方」の問題が想定されているという構図になつている。そしてもちろん、「採録の趣旨」の執筆者が言うところの「極めて卑近なもの」とは、お嬢さんとKと「私」という三者の間に発生する色恋沙汰を指していると考えてよい。言い方を換えれば、恋愛と友情の相剋、ないしは恋愛と学問の相剋という問題である。「採録の趣旨」の執筆者の理解では、「極めて卑近なもの」として映ずる「ころ」に、「青少年に最も多くの愛読者

をもつ」理由があり、それでもなおかつ教科書に採録するのは、色恋沙汰とは異なる「人間の心の在り方」というところに『ころ』という小説の教材価値を見出しているからなのである。

色恋沙汰とは別次元のところに教材価値を見出した教科書編纂者が採録したのは、『ころ』上編の「先生と私」の一節である。鎌倉の海岸で偶然「先生」に出会つた「私」が、東京へ戻つたあと、先生の自宅を訪問するようになって次第にその人間性にひきつけられていくという部分だ。全部で三十六節ある上編「先生と私」の中でも、冒頭部分に近い第四節から第七節までにあたる。ただし、Kの墓がある雑司ヶ谷への墓参を描いた部分であり、下編「先生と遺書」につながる問題の所在が暗示される重要な場面である。しかも、本文に先立つて「あらすじ」が掲載されていて、「先生」が「私」に遺書を届け、自ら死を選んだことが明らかにされている。「あらすじ」の後半部は次のようになつている。

先生はかつて、自分と血を分けた実のおじに、財産を詐取されたことがある。これが先生の人間への懐疑の出発であった。しかし、これは自己に対する不信の念ではなかった。ところが、先生自身ある恋愛に関して、自分の親友を裏切る行為を犯すことにより、深い罪の意識と、人間自体の持つエゴイズムに苦悩の毎日を送ることになつた。その結果、倫理的見地から自己の存在に全く絶望し、ついに自分の生命を絶つたのであった。――

採録されているのは上編だが、このような「あらすじ」がほどこされ

ていることよって、教科書の読者は、『ころ』全編のおおまかな構図をあらかじめ知った上で「先生」の墓参りの場面向き合うことになる。しかも第四節には、「先生の亡くなった今日になって、初めて解つて来た」というような記述が含まれている。教科書の読者は、「自己の存在に全く絶望」した「先生」に共感しつつ、「先生」の苦悩が具体的にはどのようなものであるかを読み取るうとする方向に誘導されていると言つていいだろう。「あらずじ」では「恋愛と友情の相剋」には詳しい言及はなされず、「極めて卑近なもの」は後景に退いている。上編「先生と私」の第四節から第七節の採録によつて前景化するのは、死者と向き合う「先生」の心理の闇なのである。だから、教科書に採録された本文のあとには、たとえば次のような「学習の手びき」が付されている。

一、本文に現われているところから、「先生」の人格を説明してみよう。

二、「先生」の墓参りはどういう意味があるか。本文を読んだだけで推測してみよう。さらに『ころ』全文を読んでその点を検討してみよう。

三、「先生」のような考え方について、おのおの感じた点を語り合おう。

「学習の手びき」の四と五では、教科書で既に学習済みの夏目漱石の他の小説や、島崎藤村の小説との比較検討がうながされている。したがつて、一から三が『ころ』を読解する学習の中心である。二では、

『ころ』全文を読むことを要求してはいるが、「先生と遺書」に描かれている恋愛悲劇に寄り添つて「先生」やKの心理を追いかけることを読解の中心にしているわけではない。全てが終わり、Kという死者と向き合う先生の心理を考えることが読解の中心なのである。下編「先生と遺書」を読むのも、あらためて墓参りの場面に立ち戻り、「先生」の心情を付度するためである。下編「先生と遺書」の一節を教材化し、友情と恋愛の相剋のドラマを前景化した後年の定番教材『ころ』との決定的な違いがここにある。そして、こうした採録方法の中に、教科書編纂者の〈欲望〉が剥き出しになっている。

『ころ』という小説の基本的な構図は、友を裏切つて自殺に追い込んだ「先生」が、罪障感を抱いたまま生き長らえて、Kという死者に向き合うところにある。「先生」が乃木希典の殉死に深く心をゆさぶられるのも、生き残りの罪障感という問題と無縁ではないだろう。遺書の中で直接言及されているのは、「西南戦争の時敵に旗を奪られて以来、申し訳のために死のう死のうと思つて、つい今日まで生きていた」ということであり、罪障感を抱えて生きていた「三十五年」という年月の重みが強調されている。しかし、一八九二年（明治25）にいったん那須に隠棲した乃木希典が、日清・日露の戦争において再び軍務に就いていることを考えると、西南戦争だけでその死を説明することは不自然である。おそらく同時代の日本人が最も最初に想起したのは、日露戦争における一九〇四年（明治37）の旅順攻略戦との関係だろう。旅順攻略戦において第三軍司令官だった乃木希典は、二〇三高地の戦略的重要性を無視した無謀な総攻撃を繰り返し、五万人を超

える大量の死傷者を出してしまう。しかも、一連の戦鬪で長男の勝

典、次男の保典を相次いで亡くしてもいる。殉死の理由としては、三十五年前の西南戦争よりもはるかに話が通じやすい。逆にいえば、だからこそ遺書の中ではるか昔の「西南戦争」に拘泥して殉死したとされていることに深く心を動かされたとも言える。たとえば、「徴兵忌避者としての夏目漱石」⁽²⁾を書いた丸谷才一も、『先生』と乃木大将とのアナロジーは「どうも成立しにくい」と言い、「乃木大将はいつたい誰に對して裏切りの罪を犯したのか」と述べておきながら、結局「兵士たちを二〇三高地でさんざん戦死させたにもかかはらず生きつづけた乃木大将は、Kを死なせたにもかかはらず生きつづけた「先生」と相似形をつくる——漱石はおそらくそう感じたのではないか」と書きつけている。もちろん、夏目漱石が四国の松山へ行ったのは徴兵忌避の現場である東京や北海道から遠く離れたからだとか、山口の高等学校へ行かなかつたのは「彼が『捨て』ねばならぬ東京と地続きのため」であつたからだとか、「有名な探偵嫌い」も「自分の徴兵忌避があげられることを恐れてゐたせいだとかいう丸谷の説は、牽強附会の言というしかない。漱石自身の徴兵忌避に対する罪意識とその事実が暴露する事に対する恐れを、『ころ』という小説から読み取ることは難しい」⁽³⁾。しかしここで注目したいのは、ちょうど定番教材への道を歩み始めた『ころ』の中に一九六九年(昭和44)の段階で「徴兵忌避者としての漱石」という問題を見出しているのが、一九二五年(大正15)生まれの丸谷才一であるという事実である。徴兵忌避者としての夏目漱石の罪意識に言及する次の指摘などは、ほとんど丸谷の告白であるとさえ言

える。

同世代の若者たちに対する漱石の裏切りの念の辛さと、いはば彼の幼馴染みの友である明治国家(明治元年に彼は満一歳である)への裏切りを悔む心とは、微妙に交錯してゐたにちがひない。しかもその明治国家に対して彼がどんなに批判的であつたかは、『三四郎』の広田先生が東海道線の車中で呟く富士山についての片言隻句でも見当がつくだろう。

三島由紀夫と同じ一九二五年(大正14)生まれの丸谷は、昭和元年に満一歳である。したがつて、「漱石」を「丸谷」に、「明治」を「昭和」に置きかえれば、ほとんどそのまま丸谷才一論になってしまう。もちろん、丸谷は『三四郎』を書いてはいないが、「昭和國家に對して彼がどんなに批判的であつたか」を示す一節を丸谷文學の中から探すのはさほど難しいことではないだろう。現に「徴兵忌避者としての夏目漱石」の冒頭近くでも、「分析的に語ることはむづかしい」と断りながら、自らの「軍人嫌い」について言及している箇所があり、「ぼくの少年期の主題は國家と軍隊への拒絶、虚しい拒絶であつたように思ふ」と書きつけている。「幼馴染みの友である明治國家」に対する夏目漱石のアンビバレントな感情を指摘する丸谷自身の心理の中に、「幼馴染みの友である昭和國家」に対する愛憎相半ばする複雑な思いを読み取ることは、十分に可能なのである。

一九七三年(昭和48)六月に刊行された講談社文庫版『笹まくら』

の巻末に付された「著者自筆」の「年譜」によると、丸谷はどうかやら徴兵拒否はしていないらしい。新潟高等学校文科乙類在学中に徴兵され、一九四五年(昭和20)三月に「山形連隊に入営」している。八月に敗戦を迎えると九月には復学。その後、東大英文科に入学し、卒業後は都立北園高校の教壇に立ち、一九五四年(昭和29)には国学院大学助教教授になっている。作家の「自筆年譜」であるし、特に戦争中のことについてはどこまで事実在即しているのかわからないが、こうした記述の背後から丸谷才一の戦争体験のありようを想像することは可能だろう。丸谷が意識の上でどのような自らの戦争体験を処理しているかが、級友を含む同世代の青年が数多く死んでいったという事実が彼の心にまつた何の影も落としていないと考えることは困難だからである。徴兵忌避をしておきながら「乃木大将の殉死にあれほど素直に感銘を受ける主人公」を描く夏目漱石を、敗戦後の丸谷が「偽善的な文学者」として再発見し得たのは、自らが同じように「偽善的な文学者」であったからに他ならない。もちろん、ここで言う「偽善的」という言葉が、虚構世界の創造者たる作家にとって、褒詞ともなり得るものであることは言うまでもない。

戦争や震災などの大きな災厄を体験した者は、生き残っているといるという事実そのものを基盤としたいわれのない罪障感に苦しめられることがある。精神分析学者の野田正彰はこれを「生き残り症候群」(4)と呼んでいるのだが、敗戦後の日本人は、死者たちが殉じた戦前の価値観を放棄して新たな社会を作り始めてしまった以上、少なくとも生き残りの罪障感に見舞われる潜在的な可能性を持っていると言える。だ

からこそ、歴史的仮名遣いにこだわりの徴兵忌避者を「自由な反逆者」として描いた『笹まくら』(一九七一年、河出書房)の作者である丸谷才一が、『ころ』の背後に懲役忌避に対する夏目漱石の「重大な罪意識」を読み取ったのである。丸谷才一の次のような言葉は、生き残りの罪障感を共有する者だからこそ書き得たと考えた方が合点がいく。

一般に青年にとつて、自国の戦争は、自分の命を捨てなければならぬことを意味するゆゑ、極めて深刻な問題である。それに漱石の場合には、わづか二年前の徴兵忌避のことがあるから、もしあのときああいふ処置を講じてゐなければ自分は今ごろ兵隊として戦つてゐたはずだといふ気持があつたことは、容易に推定できよう。しかし問題なのは、そんなふうに想像して味はふ恐怖や安堵感のせいでの心のドラマではない。それももちろんあつたらうし、徴兵のがれがもしあばかれれば軍国的な風潮のなかで指弾されるといふ怯えも作用したらうが、自分と違つて徴兵忌避をしなかつたせいで兵隊に取られ、いはば自分の身代りのやうに戦死して行つた同年輩の若者たちに対してすまないという気持、自責の念、自分は卑怯者ではないかといふ疑惑、ひよつとすると自分の単なるエゴイズムなのかもしれないものへの悔いは、もつと痛切に彼を苦しめたであらう。

教育現場での実践を通じて定番教材の誕生に寄与したであろう国語教師たちの中にも、丸谷才一と同世代の文学青年が数多くいた。また、敗戦後の日本で教科書編集に携わつたのは、徴兵忌避者と同じ

ように戦争をやり過ごした、丸谷才一よりも年長の文学研究者たちである。徴兵忌避者を英雄視し、軍隊に対する嫌悪感を言葉にしてはばからない丸谷才一が、その一方で夏目漱石の「徴兵忌避に対する罪意識」を読み取っていることは、その意味で非常に興味深いことと言えよう。定番教材『ころ』における生き残りの罪障感という問題は、敗戦後の教科書編集に携わった明治生まれの国文学者や、復員して敗戦後の日本で教壇に立ち、『ころ』の定番教材化に貢献した国語教師たちの問題でもあり得る。戦前には教材化されることがなかった『ころ』が、敗戦後に教材化されるや一躍定番教材への道を歩み始めたのはなぜかという問題を解く鍵がここにある。

三、定番教材への道

『ころ』の定番教材としての基本形を作ったのは、一九六三年（昭和38）に発行された筑摩書房版『現代国語二』である。清水書院版とは異なり、下編「先生と遺書」の一節を採録していて、他の教科書会社が『ころ』を採録する際の範型となった。筑摩書房版の教材『ころ』は、次のようなリード文から始まっている。

『ころ』は、「先生とわたくし」「両親とわたくし」「先生と遺書」の上・中・下の三編より成っている。上編では、「わたくし」なる青年が、偶然、鎌倉の海岸で先生と知り合いになり、その人柄にひかれて、先生のもとに出入りするようになり、中編では、大学を卒業して故郷に帰り、重病の父を看護している青年のもとに、自殺した先

生からの遺書が送りつけられる。下編はその遺書で、先生（以下本文中の「わたくし」）の暗い過去が語られ、死を決意するに至った心事が述べられている。

ここに採ったのはその下編の一部である。

『ころ』全編のあらましを提示した上で本文につなげている点では、清水書院版と共通している。本文は下編「先生と遺書」の一部であり、二六節最後の部分から三二節までのあらすじをはさんで、二三節から五〇節までが、二段組で二五ページにわたって採録されている。五節以後の物語についても、本文のあとに要約が示されている。採録部分の物語の焦点は、お嬢さんをめぐる「先生」とKとの争闘であり、クライマックスはKの自殺である。したがって、清水書院版とは異なり、教科書の読者に見えてくるのは、「恋愛と友情の相剋」、言い換えれば色恋沙汰である。お嬢さんをめぐる争闘に勝利し、生き残った先生が、祥月命日に墓参してKという死者とどのような思いで向き合っているのかという問題は後景に退かざるを得ない。もちろん、教科書採録部分の前後にあらすじがほどこされているから、『ころ』全編のあらましは理解できる。清水書院版と同じように、「学習ノート」には「できれば、『ころ』全編を通読してみよう。」という記述もあり、発展的な学習として死者に向き合う「先生」の心情に思いを寄せることもできない話ではない。

たとえば、教授資料『現代国語 学習指導の研究二』（一九六四年四月・筑摩書房刊）の解説でも、漱石と鷗外を「近代日本文学の最高

峰」と称揚した上で、次のように述べている。

「自己の心を捕えんと欲する人々に、人間の心を捕え得るこの作物を授む。」と、漱石は広告文に書いているが、自己と人間の心を深く捕えることを願うすべての青年にとつて、この作品は心の真実の十字架としてきびしく光り輝いている。青年期は、自我の問題に悩み、友情の問題に悩み、恋愛の問題に悩み、その他多くの人生問題に悩むが、そのいずれも解決のなまやさしいものではない。この作品は、友情と恋愛のからみ合いを主題としながら、自我意識を鋭く、深く分析して、人間存在の深奥にひそむ真実を凝視し、その倫理的課題を追求している。学習者にとつて、あるいは刺激が強すぎるかもしれないが、しかし、このような問題が決して自分たちの将来にとつても無関係なものではないという関心から、学習意欲をかき立てられることと思う。

「人間存在の深奥にひそむ真実を凝視し、その倫理的課題を追求」とか「心の真実の十字架」という言葉を書きつけた執筆者の脳裏には、Kの死後生き残つて罪障感を背負い続ける「先生」の孤独な姿が浮かんでいられると思われる。青年期を終え、敗戦後の日本で「大人」として生きている教科書編纂者や国語教師にとつて、死者と向き合う生者の罪障感こそ「十字架」という比喻には似つかわしい。その一方で、下編の二三節から五〇節までの採録によつて、高校生の前に「主題」として立ち現れてくるのは、「友情と恋愛のからみ合い」という「極めて卑近

なもの」である。つまり、筑摩書房版の採録方法は、一方で生き残りの罪障感を抱える教科書編纂者および国語教師の「倫理的課題」を代行し、他方で「極めて卑近なもの」に心を奪われる高校生の心理に「びているのである」。

たとえば、教科書に付された「学習ノート」や「学習の手引き」を見ても、「先生」とKの心理分析に重点が置かれていることが明らかで、学習のまともに相当する「学習の手引き」三〜五には次のような課題が設定されている。

三 友情と恋愛の問題から、この小説に描かれている人間関係について話し合おう。

四 作者は、友情と恋愛の問題を追及しながら、この作品で何を描こうとしていると考えられるか。

五 この小説の文体の特色は、どんな点にあると思うか。

一九六四年(昭和39)四月に教師用指導書として発行された『現代国語 学習指導の研究 二』の「学習の展開(例)」を見ると、全六時間の中の第三時と第四時が、「友情と恋愛のからみ合いをたどる―心理分析を中心に―」という内容になっている。しかも「友情と恋愛の問題」を取り上げた「学習の手引き」三・四を中心とした話し合いの時間が、「主題をめぐつての討論会」として第五時に設定されている。第六時は「漱石文学の特質と『ころ』の真実」となっていて、教師が講義を行うことによつて締めくくられる形が取られている。ただし、一九六七年に

改訂版が出たときには、第六時は割愛され、第五時がまよめの授業になつてゐる。教科書編纂者が想定している授業展開の中心が、「先生」の恋愛と友情をめぐる心理的葛藤の劇に置かれていて、教師の実践もそういう方向に向かいつつあることが推測できる。友情と恋愛の葛藤に即した授業展開の方が生徒の「食いつき」がよく、「漱石文学の特質」の講義などは蛇足だということなのだろう。新しく採録された教材であり、教師用指導書の教師に対する影響力が現在よりも相対的に高かつたと推測される時期のことだけに、「恋愛と友情の相克」という問題を重要な学習課題として取り上げられていることは、『ころ』が定番教材になつていく要因を考へる上で重要である。

一方で、指導書の「教材の研究」には、次のような記述もある。

主題 教科書に採つた部分は、下宿のお嬢さんへの愛情をめぐつて、「わたくし」と友人Kが対立し、「わたくし」の策略に敗れたKが自殺する話で、青年期の友情と恋愛の葛藤が死の悲劇を導く過程を心理的に描いているが、原作『ころ』の下編の主題は、Kの自殺によつて、「わたくし」が自己の不信行為による罪の意識からのがれることができず、お嬢さんと結婚した後も、生きる倫理的根拠を失つて苦悩し、ついに自殺するに至る後半の部分ではつきりしてくる。すなわち自我の拡充が他人を傷つけ、ひるがえつて自己を傷つけることとなる人間のエゴイズムの根深さがきびしく直視されている。

教科書の読者たる生徒が「青年期の友情と恋愛の葛藤が死の悲劇

を導く過程」に「主題」を見ることを想定しつつ、教科書で授業を構想する側は「自己の不信行為による罪の意識からのがれることができず、お嬢さんと結婚した後も、生きる倫理的根拠を失つて苦悩」する「先生」の中に「人間のエゴイズムの根深さ」という「主題」を見ているのである。教師用指導書の世界を「内」、教科書を読む生徒の世界を「外」とすれば、まさにダブル・スタンダード（二重基準）と言つてよい。しかも、「友情と恋愛の葛藤」を体験しながら教科書を読む高校生は、終生ぬぐうことのできない罪障感を抱えたまま苦悩の中を生き続ける「先生」を許容し、免罪する可能性が高い。『ころ』をラブロマンスとして読むような、「卑近なもの」に関心を寄せる教科書の読者にとつては、苦悩とともにお嬢さんを手に入れた「先生」は、その生を肯定されるべき主人公であるからだ。そのうえ、かりに生き残りの罪障感を抱えた教師が『ころ』を教えたとすれば、生徒とともに行われる「先生」の罪の赦免は、心理的には自らの罪障感の解除にも転化し得る。「先生」を断罪することが困難であると感ぜられる授業を成立させることが、自らの生き残りの罪障感を解除することにつながるという心理的機制がここにはある。そう考えると、「先生」という普通名詞を二人称や三人称としてだけでなく、一人称としても使い得るということが、極めてグロテスクなことと思えてくる。たとえば、教室という空間で、「先生の罪を赦せますか。」という発話をした場合、「先生」とはいつい誰のことだろうか。

「主題」をめぐるころしたダブル・スタンダードは、教える側と教えられる側にカタルシスをもたらし、『ころ』の定番教材化を推進する原

動力となった可能性が高い。上編の墓参場面を採録した清水書院版と、下編の友情と恋愛の葛藤の場面を採録した筑摩書房版の決定的な違いはおそらくここにあるのだ。

四、定番小説誕生のバックストーリー

清水書院の『現代国語二』の編者である高木市之助は、一八八八年（明治21）生まれ。一九二四年（大正13）の創立時から九州帝国大学に転出する一九三九年（昭和14）にまで京城帝国大学法文学部の国語国文学第一講座を担当している。朝鮮半島における（国語教育）の中心にいたわけである。

筑摩書房の『現代国語二』の編者である西尾実は一八八九年（明治22）生まれ。戦後は国立国語研究所の初代所長となるが、戦前は松本女子師範学校や東京女子大学で教鞭をとっているだけでなく、満蒙開拓青少年義勇軍送出に大きな役割を果たした信濃教育会発行の『信濃教育』編集主任を務めていた。

同じく『現代国語二』の編集者に名を連ねている臼井吉見は、一九〇五年（明治38）生まれたが、松本女子師範学校を退職して上京し、東京女子大学に勤めたあと、一九四三年（昭和18）十月に三十八歳で陸軍少尉として応召している。

さらに、『現代国語二』の教師用指導書の「作品鑑賞」の中で自殺を決意するに至る「先生」の心理を詳述し、「終生ぬぐうことのできぬ罪障意識」にまなざしを注いでいるのは秋山虔であり、「漱石は『ころ』』の主人公を自殺させた。しかし自身では死ねなかった」と同じ指導書

の「作者研究」に書きつけたのは分銅惇作である。いずれも一九二四年（大正13）生まれで、丸谷才一と同世代だ。

彼らの過去は、敗戦後を生きる日本人にとっては決して特別なものではないだろう。ここまでに挙げた人物以外の編者や指導書執筆者も、多かれ少なかれ似たような形で戦争をくぐり抜けて来たに違いない。だから彼らは、「徴兵忌避者」としての夏目漱石」を書いた丸谷才一と同様に、死者と向き合う「先生」の罪障感に敏感に反応するような心的条件を、少なくとも識域下には持ち合わせていたはずである。もちろん、教科書編纂者のどのような心理が『ころ』の採録をうながしたのかを、実証的に明らかにすることはきわめて困難である。しかし、教科書に採録され、定番教材となつて多くの教師と高校生に読まれてきた受容史⁽⁵⁾の問題が重要であるとするなら、高木市之助や西尾実が『ころ』に何を讀み取っていたのかを考察することは無意味ではあるまい⁽⁶⁾。二十一世紀初頭の現在、夏目漱石を研究している国文学者の大半が、教科書で下編の一部を讀んだ上で『ころ』全編を文庫本で読んで感想文を書くことを強いられてきた高校生だったであろうことを考えるとなおさらだ。

『ころ』という小説を聖典に祭り上げていく最初の導因になったのは、教科書編纂者および国語教師が抱える敗戦後の罪障感ではなかったか、ということが、ここまで論じてきたことから導き出されたわたしの仮説である。受容史という観点を導入すれば、『ころ』はまさしく敗戦後文学としての相貌を持っているのだ。この仮説の延長線上には、抑圧された生き残りの罪障感を解除するための「鑑賞」を押しつ

けられた高校生が、「先生」を免罪するような読みを拒絶することで研究者として出発したのではないかという第二の仮説が提示しうる。「先生」に遺書を押しつけられた青年「私」に読みの比重を移すことで従来の読みを組み換えた小森陽一は一九五三年(昭和28)生まれ、石原千秋は一九五五年(昭和30)生まれである。つまり、敗戦後の罪障感を抑圧したまま「偽善的な」生を営む世代への反発や教壇に立つ教師への敵意が、『ころ』の「先生」に対する批判的なまなざしの由来ではないかという仮説である。もちろん、こうした仮説を検証していくためには、『ころ』が定番教材となっていた時期に影を落としていたはずの、政治運動「敗戦後」の罪障感も考慮する必要がある。たとえば、しばしば夏目漱石に擬せられる村上春樹の小説などに影を落としていくような政治運動「敗戦後」の罪障感である。しかも、『ころ』が未だに定番教材であるということと考えると、日本人にとって「敗戦後」とはじつは常に現在進行形の問題ではないのかという第三の仮説も提示し得るのだが、これらの仮説の検証は他日を期したい。

注

(1) 関口安義「漱石と教科書」(一九八二年五月・學燈社刊、竹盛天雄編『別冊國文學NO.14 夏目漱石必携』所収)に付された「主要教科書漱石作品一覧表」の中では、一九六三年十一月の筑摩書房刊『現代国語2』が『ころ』を収録した最初の教科書である。しかしその後、鈴木豊次や藤井淑禎らによつて清水書院版の存在が明らかになった。井上孝志の『高等学校における文学の

単元構想の研究―ころ(夏目漱石)の教材解釈と実践事例の検討を通して』(二〇〇二年二月・澁水社刊)に、その間の経緯が簡潔に記してある。

(2) 初出は一九六九年(昭和44)六月『展望』。その後、一九七九年(昭和54)六月に刊行された『コンプスの卵』(筑摩書房)の巻頭に収録された。

(3) 駒尺喜美は『ころ』における殉死の意味―丸谷さんへの手紙―(一九六九年八月、『展望』)の中で、『ころ』を証拠として漱石の『うしろめたさ』をいい立てることに疑義を呈している。

(4) 『戦争と罪責』(一九九八年八月、岩波書店刊)。

(5) 受容史を考える上で逸することのできない、最も早い時期の実践記録に、都立航空高専教授だった増淵恒吉の『ころ』の学習指導(一九六六年七月、『日本文学』)がある。増淵は、一九〇七年(明治40)生まれで、臼井吉見とほぼ同世代である。

(6) たとえば、一九六七年(昭和42)に刊行された回想記『国文学五十年』(岩波新書)によると、高木市之助が東京帝国大学を卒業したのは、「明治四十五年七月十日」のことである。卒業式に臨幸した明治天皇は、まもなく床に伏し、崩御する。つまり、高木市之助は、『ころ』で「先生」の遺書を受け取る青年「私」と同世代なのである。同じ年に東京帝国大学選科に入学している西尾実も、年齢は一つ下で同世代である。彼らが父の時代である「明治」をどう捉え、「昭和」をどう生きたかということは、定番教材『ころ』誕生の経緯を考える上では、無視し得ない問題だ。